

アジ研流  
読書案内

—研究者が薦める3冊

## 人類学に進路を取れ！

塩田 光喜

## 一・「アリババと四〇人の盗賊」

私は二才から八才までの幼少期を祖母の里、香川県仁尾町で過ごした。仁尾は西讃岐の平野から瀬戸内海に向かって突き出した細長い庄内半島の付け根にできた町で、三方を小高い山に囲まれ、そして南を燧灘に臨み、人口八〇〇〇ほどの人々が江戸時代から地続きのような土塀や白壁の蔵のならば町並みで暮らしていた。(夕方になると虚無僧が尺八を吹きながら通りを歩いた。)室町時代、仁尾の浦は波の穏やかな良港で、瀬戸内を舞台とする海洋交易の民は賀茂神社の神人、供御人として保護を受けるとともに、社に奉仕して大いに栄えた。京の賀茂神社の分社が海岸に面して、広大な神域を社殿と松林が神さびた風情で覆い、私の大叔父や曾祖母が唐辛子の商いをしていた泰田の家から二〇メートルの所にあつた。

私は、曾祖母、祖母、大叔父、大叔母、彼女の娘からなる大家族に生まれ、賀茂神社(土地の人達は「明神さん」と呼んでいた)で、忍者ごっこや影踏みごっこをして遊んだ。月一回、高松から父がやって来て絵本をどっさり置いていくてくれた。源頼光と四天王の大江山の鬼退治や京の五条の橋で義経が弁慶をこらしめる日本の物語、ヘンゼルとグレーテルのお菓子の家といったグリム童話など西洋の物語を初め、多くの物語を曾祖母や祖母や大叔母が読んでくれたが、私のお気に入りは何と云っても『アラビアン・ナイト』の「シンドバッドの冒険」や「アラジンと魔法のランプ」、中でも一番のお気に入りには「アリババと四〇人の盗賊」だつた。今でも思い出す。顔の濃い異国の人々の面差し、財宝の隠された岩山、馬に乗った盗賊達、そして街の家々に白い目印をつけて回る女召使いの、古い瀬

戸内の町並みと人々とはあまりにも異なつた姿に私はすっかり魅了されてしまったのだ。そして兄のカシムがアリババから岩山と財宝の話しを聞いて自分も宝を持ち帰ろうとして洞窟の中に入ったはいが、出る時になって岩を開ける呪文を忘れてしまつて、「開けムギ！」とか「開けマメ！」と間違える度に、私は興奮して「違う！」「そうじゃないってば！」と大騒ぎをするのだった。余程この物語が気に入つたらしく、一回読み終わるともう一回、もう一回とくり返しがむので音を上げた曾祖母は祖母に「カツ子、代わつてくれ！」と悲鳴を上げたということだ。

幼稚園に入る前から、私はもうすでに精神的遠心力を発揮し始めていたようだ。これが私を人類学の道に進ませるきっかけになった最初の本だった。

その頃、私は、二〇才の生命感覚とはほど遠い言葉を扉に掲げた一冊の書物に出会つた。レヴィ・ストロースの『悲しき熱帯』である。当時、構造主義は西洋思想の最先端を行く知のモードとして流通していた。フーコー『言葉と物』、ロラン・バルト『零度のエククリチュール』と並んで、レヴィ・ストロースの『野生の思考』と『悲しき熱帯』はその犀利な分析と豊かな感性の結合によって、抽象概念を積み上げていくドイツ観念論に親しんでいた私には、バッハやベートーヴェンやブラームスのドイッ絶対音楽の世界から、ドビュッシーやラヴェルのフランス印象主義音楽へと引き出された音楽少年のように新鮮に感じられた。うだるような夏の日に、冷たいシャワーを浴びるような感覚だ。

実は、私を人類学へと進路を取らせたのは『悲しき熱帯』よりも『野生の思考』である。数学・哲学少年だった私には具体的な感覚的カテゴリーに数学的置換操作を

## 二・『悲しき熱帯』

「ローランのために、おまえと同じようにこれまでそうした世代は亡びてきたしこれからもほろびるだろう」(ルクレティウス『事物の本性について』)。

加えて、人類の普遍的な認識論的構造に肉迫していくレヴィ・ストロースの腕前は、幾何学的明証性と人文学的感性の理想的な結合と映っていた。

そして『悲しき熱帯』というきわめて上質のトラヴェログ（旅行譚）は、私の持ち前の精神的遠心力を励起させたのだった。

「この宿命を人力で変える唯一の方法は、社会の規範が意味を持つことをやめ、同時に彼らの属する集団の保証や要求が消滅する危険に満ちた辺境まで、思いきって行ってみることである。良俗の支配している領域の限界まで、生理的な抵抗あるいは肉体的、精神的な苦痛の極限まで、行ってみるのである」（レヴィ・ストロース「二〇〇二」川田順造訳）。この文章は、私の中の「アリババと四人の盗賊」の世界へのあの憧れに新たな火をつけたのだった。

私は、進路を数学にするか、人文学にするか迷っていた。私の能力では一日二四時間、一年三六五日を一〇年間数学に捧げて、さらにそのうえで数学の女神からインスピレーションの一閃を恵まれねば、数学史に貢献できる業績を上げることは難しいように思われた。「人類学に進路を取れ！」『悲しき熱帯』は私にそうささやきか

けた。「こうした力の貯えによってこの命知らずは、さもなければ変わることもない社会秩序を、自分の都合のよいように取り壊すことができるかもしれないのである。」（レヴィ・ストロース「二〇〇二」川田順造訳）

わたしはルビコンを渡ったのである。人類の最初の光景に立ち会うこと！これが私のライトモチーフとなった。

「未開地を走り回った人々の、もう髪の毛の白くなった先輩である私は、灰のほかには手の中に何も持たずに帰ってきた唯ひとりの人間として留まった方がよいのか。ただ私の声だけが、脱出の失敗を認める証言を行うのだろうか。」（レヴィ・ストロース「二〇〇二」川田順造訳）。

レヴィ・ストロースのこの深い失望と諦念と無常感が、冒頭のルクレティウスの言葉と響き合っており、実は『悲しき熱帯』の通奏低音として全篇に流れているのだが、二〇才の私には聞き取れなかったのだ。

そして、二〇代の最後の二年間をニューギニア高地のインボンダ族とともに暮らし、私は、石器社会が文明の気圏に突入して、まばゆい光を放ちながら燃え上がる

貴重な瞬間を共有する。

レヴィ・ストロースの主題が「変換（transformation）」だとすれば、わたしの主題は「変身ないしは変容（metamorphosis）」だ。ダイナミックに変貌するニューギニア高地に身をさらすことにより私は人格的メタモルフォーゼを遂げたが、レヴィ・ストロースは自らのアイデンティティを変えることなく、僅か三カ月の滞在でのチャンス・オブザベーションで、

ポロロ族やナンビクワラ族の文化の断片から変換群を作って見せるだけだ。私が指導教官なら、彼のブラジルのインディオに関する民族誌的記述は落第物だ。

『悲しき熱帯』の魅力は、そのモンテーニュ的省察と繊細で鋭敏な感覚がとらえた映像を回想するプルーストの文体にある。知性と感性と豊かな教養が独得のプレンドで芳醇なハーモニーを奏でるのだ。それが多分、二〇才の私を魅了したのだろうし、今、読み返しても極上の読書の快楽を与えてくれる。その快楽は『失われた時を求めて』に匹敵する。

そしてレヴィ・ストロースは仏教への親近感を披瀝して憚らない。「批判の果てに、聖賢（ブツダのことだ！）が事物と人間の意味の拒否へと道を拓いてくれる。

それは宇宙を無と観じ、自らもまた宗教として否定するひとつの修煉である」（レヴィ・ストロース「二〇〇二」川田順造訳）。そして冒頭のルクレティウスの言葉に呼応してこう言う。「世界は人間なしに始まったし、人間なしに終わるだろう」（レヴィ・ストロース「二〇〇二」川田順造訳）。そして全篇の最後はボードレルの猫と重い瞬きを交わすことにより閉じられる。

紙数も尽きた。私は古代日本の偉大なる仏教思想家の詩をもつて、ルクレティウスとレヴィ・ストロースへの返歌としたい。作者は沙門遍照金剛、またの名を弘法大師空海という。その著『秘蔵宝鑰』の序に掲げて曰く、

三界の狂人は狂せることを知らず、四生の盲者は盲なることを知らず。生まれ生まれ生まれ生まれて生の始めに暗く、死に死に死に死んで死の終わりに冥し。

（しおた みつき／アジア経済研究所 貧困削減・社会開発研究グループ）